詩集

六つの交響

高村昌憲

詩集 六つの文字　目次

Ⅰ（四行二連詩序奏）

家族旅行
ばら苑
手と手
蝶の伝言
招待
等高線
柘榴
深刻な飛躍
税と蛍
自適
正視

Ⅱ（蛍讃歌）

蛍を噛む
蛍の舞踊
蛍の血
蛍伝説
蛍と永遠
三つの光
残したいもの
蛍は生きている

Ⅲ（ソウル行）

金浦国際空港
漢江
利川陶芸村
龍門寺
鵲

唐辛子味噌
南大門市場
濁り酒
民話風に（Ⅰ）
民話風に（Ⅱ）

Ⅳ（小さな願い）

自己紹介
白い恋
六つの文字
ビリ
お化け屋敷
樹木
バンクシア
花梨のある静物
桜
ばら苑の肉声
競争原理
競争原理再考
アクセス不良

あとがき

家族旅行

梅の花から桜の花へ
季節の色が少し変わる頃
家族の距離を縮る旅へ
伊豆の海と山は同じ色

一人ひとりが少し無理をして
変わろうとしていたから
変わっていくことへの勇気として
変わらない風景を見たかったから

ばら苑

桃の花から薔薇の花へ
夫婦の調べが毎日同じだから
思い切って変調してみる心の笛
二人で出掛けたばら苑の薔薇

美しい薔薇に必要な手入れ
夫婦のばら苑にも必要な肥料
虚飾を生む余分な雑草を取れ
明日を描くためのタブロー

手と手

大きな手に残る　遠い記憶への復讐――
幼かった手が　亡き父の拒絶に出会った時
空中をさ迷う淋しさに馴れなかった手
待っているものもなかった都会の道

小さな足と大きな足が　並んで歩き
大きな手は小さな手を　自ら決して離さない
コナラとシイの雑木林の道は待っている
失った季節を　ふくらませて待っている

蝶の伝言

たしかに　黒い蝶が指先に触れた
蝶は一瞬　私の指先を花のように感じた
蝶の感情が　つかれた体のなかを走る
真夏の日が一瞬　摂氏四度の静寂を迎える

都会よ！　小さな自然の指先に触れよ
酸化した人々の心臓に　蝶の血を流せ
金属疲労した集団の血管を再生せよ

都会の静脈を　摂氏四度の感情で濡らせ

招待

ここに来て　よく見てご覧！
青空に似合う海上(かいしょ)の森を
ここに来て　よく聞いてご覧！
証言する小鳥たちのうたを

ここに来て　ゆっくり息をして下さい
秋いろの本当の匂いが分かるはずだ
ここに来て　ゆっくり歩いて下さい
やわらかな紅葉の道が正しいはずだ

等高線

たき火の煙と　柿の実を詰め込み
真空パックされていた＾優しさ＼
口を開けて　そっと取り出す朝
あたらしく酸化する美しい山並み

知を愛する地名に住む人々の心は
おなじ優しさで結ばれた等高線
その優しさが描いているのは永遠
海上の森に　虹色の蜘蛛の巣の和

柘榴

ドライフラワーになった　紅花と麦穂
竹かごに同化した　トウモロコシ
デコイの視線は　孔雀の羽の死角を定める
赤の世界に誘惑された者たちは∧死∨の罠に嵌る

森の歴史を幾重にも語る　蔓の対角線上
酸化した時間に　青空の欠片を映すグラスが一つ
大理石の壺の中で成熟した　柘榴よ！
表皮を割り　生命ある真紅のルビーを放出せよ

深刻な飛躍

蛍がいなくなれば美しい自然も失う
自然を失えば柔らかい感情が小さくなる
感情が小さくなれば優しさを厭う
優しさを厭えば他人を理解出来なくなる

他人を理解出来ない人は争いを始める
争う人は殺されるより権力が欲しい
権力が欲しい人は核兵器が欲しくなる
核兵器が欲しい人に蛍は要らない

税と蛍

地価が下がっても固定資産税は上がる
時価と課税評価の差を縮めるために上がる
市街地に残された緑の谷戸にも
完璧に被われた宅地並課税の黒い雲

地主達には蛍の明かりが見えない
ふんわりふわりと飛来する光の評価はゼロ
いくら蛍が貴重でも税金が払えない
素っ裸で浴びる相続税という谷戸の風呂

自適

それは旅立ちの感覚
大気よりも軽く
裏の谷戸(やと)で蛍が舞う
疲労した脊椎が伸び往く

中枢神経の快い回復
蘇る海水の記憶
感情に符合した美しい光
自然へ署名する満足

正視

迷信のように核兵器を恐れる人々よ
恐怖だけでは平和を保持することが出来ない
思い切って禁断の園を覗いて見よ
私の町の原子力研究所の火は青白い

その星雲のような光はガン細胞を焼き払い
中性子は考古学者の時代測定を助ける
村々を沈める水力発電用のダムもいらない
原子力の火は　本当は蛍の光に似ている

蛍を噛む

○

いつまでも見ていたいと心が騒ぐときがある
そんな激流を君は体内に持ったことがあるか
遠い山並みも仄暗い形になるときがくる
それは妖精たちが蒔いた銀粉の開花

小さな花々は伝説の風に揺らぎ　重力を失う
丘を越え　湖を渡っていった敬虔な伝道
地上から去った化身たちへのレクイエム
君は愛の形見としての思い出を噛む

○

無くしたと思っていたものが現れた驚嘆
逝った少女が歌っていたアリアへの愛
考古学を超えて残して置きたい生命の財産
真新しい時間を創り出す砂時計

銅鐸や土器よりも軽い蛍の生命
既に春が過ぎ　夏の匂いに気づく大地
光の斉唱は緩やかに新しい旋律を産む
君は時代を指差す光と影を噛む

蛍の舞踊

○

コナラやクヌギなどの落葉樹が続く林
幼子の掌に似た若葉は淡い緑
その向こうに見える山桜は人々を誘惑し
一斉に開始された陽気な踊り

やがて第二幕の競演が始まる
人いきれのような暖かい大気が流れる
プリマドンナが軽やかに登場する季節
記憶の糸が捲かれていく観客の列

○

蛍は舞う　神が書いた台本そのままに
蛍は舞う　観客の拍手に自らの命を賭ける
小さなプリマドンナたちの静謐な踊りに
利己主義者達は遁走を余儀なくされる

蛍を殺せば人々の心に恐慌の渦が現れ
向日葵の季節には再び敗北が訪れるだろう
老詩人は呟きながら忌まわしい記憶に凭れ
人類滅亡の不吉な未来を予言するだろう

蛍の血

○

人工の夜を眠らなくなってから
闇夜の暗さに人々は無知になり
白昼の明るさにも手を焼く阿修羅
感情を抹殺して群をなした単一行動の蟻

蛍を殺せば　闇の中では蟻の増殖
半世紀前に崩壊したはずの王国の復活
発生してはならない未来への力学
蛍を護るアンダンテを奏でる音符が二つ

○

妻と二人で見た淡き一つのひかり
あれは十年前の嫁いできた六月のある日……
数字が支配していた日々からの別離
あのとき訪れたのは心静かな国への回避

二人で見た一つの蛍火
人知れずひっそりと生き継いだ命
今はツタンカーメンと同じ奇蹟の美
妻の体内にも流れる同じ純度の血

蛍伝説

○

それは月のあかりよりも
星々のあかりよりも
雪のあかりと同じ窓辺の
夏の夜の読書のもの……

いつまでも　いつまでも
灯っていてほしい
そんな別れの曲にも
応える光の狂詩曲ラプソディー

○

それは菖蒲の花よりも
あじさいの花よりも
青いつゆ草の花のいろから
名付けられたものかも……

ほたる草と人は言う
一週間だけの　ほたるの寿命(いのち)
その旋律はスコットランド民謡
何頭も集めた中国の賢人達

蛍と永遠

詩友たちに見守られて

一頭の蛍は最期の舞踏
無駄な動きは削り落とされて
真横に流れる　生命の燃焼

年齢も趣味も国籍もない
彼女には　名前も名声も要らない
個を超えて種属を思う感情よ
一週間の生命に永遠を与えよ

永遠を育てるために
カワニナが棲むきれいな水を
永遠を準備するために
孵化するための柔らかな土を

永遠を残していくために
愛の光が見える澄んだ空気を
永遠を伝えていくために
我執を超えた自然の波紋を

一頭の蛍は真横に消える
真横はやがて　弧を描く空間
星々を満天に頂く地平線になる
永遠は小さくていい　波紋の中心

三つの光

カミナリと　ウランと　蛍
自然が産んだそのままの光

私の町には三つの光がある＊
現代の私を試している三つの光

カミナリから生まれたのは電気の力
荒馬を乗りこなしたカウボーイのように
荒れ狂う水を堰き止めたのはダムの手柄
暗い夜の恐怖を　煌々と輝く憩いの時刻に

ダムと同じ力をもたらすウランの光よ
カミナリと同じ光と力を見せる演出家
物たちの年輪をも測定する中性子よ
お前の力は神なのか！　悪魔なのか！

たった一発の光が広島を舐めたとき
悪魔は　世界制覇を予言した
たった一発の力が長崎を押し倒したとき
神は　人類に大きな宿題を投げかけた

その宿題を解く鍵が私の町にある
インターチェンジに並ぶ赤いテールランプ
同じ赤い光が湾上の道を埋めている
＜海ほたる＞と発声する童謡のような音符

私の町にあるのは触っても熱くない＜原子炉＞
大都会の襞に残された奇蹟の蛍光塗料
自然のままの＜蛍＞の光を残そうとする知恵と心
それは半世紀前に神が与えた宿題への回答

残したいもの

○

子供の頃に遊んだブリキの玩具が昼寝をしている
野球のグローブも　すべての力を失っている
小学校は三つ通い　お陰で友達はさっぱりいない
木造校舎の材木の弾力だけが指先に残っている……

肉体を鍛え　明日の勝利に抒情は不要だった
過去は　肉体の動きのなかだけに記憶されていた
青春とひき換えたラケットを真っ二つに折り
突然に襲ってきたのは悔恨と怠惰の風だった

○

少女からの手紙の小さな文字を　庭で焼いた
教科書も卒業写真も　封建制度のように紛失した
単独で北岳の山頂に立った日も思い出せず
ＬＰレコードと英英辞典は売却した

朝夕に線香の前で合掌していた習慣を止めた
市役所へ行って　二四年間使用した氏を変えた
生まれ故郷の墓に入った父の位牌は川へ流し
残しておきたいものは　何もないと思った

○

独りっきりで　小さな動物になって旅に出た
私自身も残さないほうがよいと思った頃があった
ねずみの視線の高さで男と女を見ると
やっていることは愚かで　無性に噛み殺したかった

いくつもの夏が私の体のなかを通過していった……
この街に妻が来て　二人の娘にも名前をつけた
神社で撮ったお祝いの写真と　運動会のビデオテープ
谷戸の蛍を残したいと希う家族が　こうして産まれた

蛍は生きている

○

車の吐息が集団を形成すると
澄んだ蒼い空気は戦死した兵隊
便利な日々を喜んでいると
坂道を登れなくなっている肉体

運河のような舗装道路がふえると
緑の自然の肌には手術の跡
病になった証拠もないのに
執刀をお願いした覚えもないのに

○

広重が描いた海辺の松並木も
アートを溶かす酸性雨で枯れた浜
兼好法師が登った山も
杉の木ばかりの人工の山

花粉症がふえている
昔からあったものが死んでいる
昨日の日記を読んでも分からない
何かが少しづつ変わっている

○

男と女を結びつけている
見えない糸が∧自己∨に絡まる
心の周波数を見失った人々よ！
今でも蛍は生きている

愛のかたちが変わっている
涙のいろも薄くなっている
懐かしいものを感傷に変える人々よ！
それでも蛍は生きている

金浦国際空港

鉄棒を握り　逆上がりができた日のように
何かを成し遂げたように感じた
二十五メートルを夢中で泳ぎ切った日のように
一つのエポックを記したように感じた

初めて立つ地に夏空は高く　動かない
限られた人々が出会い　見送る場所
ユーラシア大陸へ続く空港は
共産主義者を排斥する関所だった

漢江

川というには　余りに豊かな動きだ
川原が無いその風景は現代的で
歴史を運ぶ運河に近かった

やがて　その流れは二つに分れ
＜南＞と＜北＞の二つにわかれ
青いドーム屋根の国会議事堂が浮かぶ
人工の島　汝矣島が現れる

利川陶芸村

土がある　水がある
風がある　火がある
高麗青磁が斉唱している
李朝白磁が独白している

八十軒の窯が集まる
ソウル南郊の陶芸村に　青春が流れる
記憶の底にある　懐かしい感触がある
国境を超えた　淡く美しい色がある

龍門寺

樹齢千百年　高さ六十米の銀杏が見たくて
＜一柱門＞を抜け　清流沿いの小径を登る
迷彩服姿の軍人達の隊列とすれ違う
苔むした風景に　若い汗が匂う

＜大雄殿＞境内下に聳える周囲十四米の大木
＜北＞と＜南＞が一つになるための
千日の祈りとともに大空へ伸び　実をつけよ
その日は　一九九九年五月十五日

鵲

啼いているだけでは　分らない
梢に止まっているだけでも　分らない
それが分るのは飛んでいるとき
翼を広げて　大空に在るときだ

あらゆる色彩を詰め込んで波打つ
黒い羽と白い羽が　ゆったりと美しい
籠や檻の中では　分らない
地球の未知を掴んで飛ぶ鵲よ！

唐辛子味噌

そのまま胡瓜につけて食べても美味しいと言う
伝統的な韓国の味だと言う
唐辛子は天日で干した最高級品らしい
その辛さは太陽の味かもしれない

息子がお世話になりますと
李おばあさんが別れ際にくれた唐辛子味噌
ずっしりと　たっぷりとある三キロのお土産
韓国の歴史のように食べ応えは十分だ

南大門市場

昔からの市場は　昔からの人に溢れ
赤唐辛子も大・中・小の大きさ
ガラスケースに入った滑らかそうな犬の肉

定価は書かれていない　これいくら！

半島のエネルギーが様々な原色に変わり
労働への従順な果実が無雑作に陳列されている
鮮やかなシルクの布地に太陽が光り
韓国語の大声に　日本語も混じる

濁り酒

ひまわりが咲く　農家の庭先
昼餉の酒は　労働を丁重に安置する
半島の時間を発酵させたその味は
少し酸っぱくて　やわらかい

明るい日射しのなかで呑む酒は
少し文明評論家っぽくて　お喋り好き
思い切って　カンバスでも立てて見れば
別離の哀しみは人類の構図のなか

民話風に（Ｉ）

とても醜い顔の女が顔を隠したまま
ある地方(くに)の権力者の男と結婚しました
男はそれでも女の顔が見たい
幸せになりたいと神に祈りました

神は二年待つように
それまでは一所懸命働くように男に命じました

あとひと月で二年になる頃
男は隠された女の秘密を知りました

それは神が女に与えたものでした
戦が始まる一ヶ月前に
その戦を予言する特別な能力を
神は女に与えました

男は女の予言にならい
戦の一ヶ月前から十分な準備をして
侵入してきた敵に打ち勝ちました
男と女は幸せに暮らしました

民話風に（Ⅱ）

とても醜いと思っている女が顔を隠したまま
ある地方の権力者の男と結婚しました
女は隣に住む美しい顔の女と
友達になりたい　と神に祈りました

妻の顔が見たい　と男も神に祈りました
神は二年待つように命じました
それまでは一所懸命働くように
男へも妻へも命じました

あとひと月で二年になる頃
男には人の心を見抜き
一ヶ月前にお茶に招待してよいことが解る
特別な能力が備わっていました

隣の美しい女が招待に応じてやって来たとき

ひと月の間に礼儀作法を身につけた妻の顔を
男は初めて見て　隣の女の顔と瓜二つなのでびっくり
男は隣の女に沢山のお土産を持たせました

自己紹介

冬が来ても　肩を並べて
歩いてくれる女ができたから
水の流れも　色も分かった河原の土手
日射しの角度も分かった青い空

すり傷だらけのテーブルに座り
ともに食事をする女ができたとき
好きなのを知った白くて淡いブロッコリー
味覚を初めて言葉にしていた翻訳機

愛する女が夏のパラソルのようにできると
その女の見つめる人影も分かってきて
記憶の切れ端では気づかなかった風景と
自らを語る言葉を掴んでいた両手

愛する女を紹介するときの男の心は
自らの決断の時を思い出しているに違いない
この地上に愛する者がいる人は
自らを山脈のように語れる人に違いない

愛する女が河原のスケッチを描いているのに
＜私は詩人です＞と何故言えないのだろう
もうそろそろ名乗り合う季節なのに
何故自己紹介ができないのだろう

その秘密をあなただけにそっと教えてあげる

名前を言ったら詩人でなくなる
年齢を言っても詩人でなくなる
国籍を言っても詩人でなくなる

白い恋

一

電話をかけるときは　背中を押されるようで
用件は何も要らない年齢だった
ただ会いたい　という理由だけで
心は表通りを歩いているようだった

人生を俯瞰して前進する教師達
そんな器用な方法は夢にも知らず
焦点を合わせて　ただ凝視する道
恋する男は　突出だらけの凸レンズ

二

成就しようが拒否されようが
受話器を握らなければ　明日がない
今日の責苦が　無限に続くように見えた抽象画
不幸になることよりも恐ろしかったのは　無為

今日を脱出して　明日を弄んでいたのは独り
精気の滞留から逃れることが青春なのか
失うことに馴れ　何時も蕾のままだった別離

恋する男は　真夜中の鳳仙花

三

晴天よりも雨が好きだった
四季のなかでは　冬の季節が楽だった
何時しか知識を軽蔑するようになり
それでも目指したのは　感情を支配する知識人

真っ青な空が好きになった頃
真夏の汗が懐かしい冬の滑走路
腐りかけた孤独が炸裂し　光の粒になった
色であることを紛失した　白い恋が始まった

六つの文字

道端の雑草を抜き取る娘は六つ
小さなスコップで　小さな花壇を作る
娘の白い掌には向日葵の種子が七つ
土中に宝石を隠すように埋められる

水やりの新しい日課がはじまる
新しい希望が春の日差しのなかで生長する
小学校に入学したばかりの娘は
眠っていた小さな生命を蘇生させる

入退院を繰り返す娘の目には
規則正しい植物のリズムが　眩しく光る

白い茎の先に　七つの若い葉……
やがて　黄色い太陽が一つ薄目を覗かせる

新しい世代の絶頂期が訪れようとしていた
開花を明日に予想したとき　事件は起きた――
翌朝　道端の向日葵の花は
当然のように　むしり取られていた

先頭を突き進むものに訪れた定めを目撃し
小さな希望を奪い取った路傍の非情へ
国を失った異教徒のように全身で抗議し
初めて　自らの言葉を表わす小さな詩人へ

＜お花をきるな＞

六つの文字が呪文のように効いている
六つの文字に込められた無垢な心に溢れた湧水
道行く人々の心に届き　透明の垣根が築かれる
残された六輪の花々への幼い小さな願い

残された花々は切られることなく生長して
鮮やかな　美しい夏の色に染まる
やがて娘は　六つの文字が見知らぬ人を優しくして
夏の美しさや希望に生長していくことを感じ始める

ビリ

五等賞だったの……
何人で走ったの？
五人で走ったの
それで　最後まで一生懸命走ったの？
走ったよ！

母親は「私に似たのね」と
小学二年生になったばかりの娘を
証人台に立ったように弁護する

父親は運動会へ行けなかった
職場の結婚式でスピーチを頼まれ
美しい花の芽を枝に付けるには
厳しい環境も時には必要らしい
と　自然の神秘について語ってきた

昨年は四等賞だった
今年は三等賞
来年は二等賞……
段々と良くなる筋書きだった娘の人生は
早くも辛く、厳しい展開を見せ出した
父親は思わず
ビリ　と言いそうになって
ハッと気がついた

娘はビリとは言わず
五等賞と言ったことに気がついた
先頭から数えることで
最後まで走り
ゴールしたことを父親は理解した

数日前に
十回目の入院から出てきた娘にとって
走るときの風は
一等賞よりも爽快で
瑞々しい喜びの芽を準備したに違いない

走る前はドキドキしたの？
全然しなかったよ
来年は四等賞になろうね
うん！

お化け屋敷

風をつくる
ススキとクズの葉で一杯の廃墟の庭
霧をつくる
古井戸のなかには死者の顔
足元は沼地の感触
壁から出た手は十二本
月光の怪しい光に
カラスに似た奇声が交錯する
お化けの変装は母親達
小学生はお化けが大好き
母親達は＜お化け屋敷＞に奔走する

娘は
父と二人でお化け屋敷へ這入る
その真剣な眼差しは

未知の世界を模索している
このとき娘は探検者になる
このとき母は独裁者になる
恐怖をコントロールできる独裁者だ
あるいは　小さな穴から
この世を覗くアウトサイダーとして
恐怖をつくる……
今では　サンタクロースを信じない
八歳の娘にとって
死者への恐怖は
生者の演技に過ぎないことを知る

不規則な体のリズムを刻む
自らの病への恐怖を忘れ
健康で優しい∧恐怖∨を遊び始めた娘は
傷痍軍人のように達観した顔を見せる
何度も　何度も嘔吐して
入退院を繰り返す娘にとって
母が演じるお化け屋敷は
平和な時代の戦争ごっこのように
魅惑的で懐かしい
父は見た！
娘の笑顔と
お化けの笑顔を

樹木

何かを始めようとしている
骨だらけの枯れた梢も
さわさわした葉陰を
記憶の糸で縫い始めている

何かを始めようとしている
短い春から
永遠が開始される季節のために
二本の桜に花が咲いた

ガードレールに人影は無い
誰もが歩ける風景の中だから
誰かが歩けば
永遠は消えてしまうだろう

遠い風景の梢が
数え切れなく見えてくる
遠い具象の樹木たちが
近くの樹木に抽象される

今在る冬と春が
数え切れない萌える色彩の間で
永遠にも匂いがあるように
樹木は夏と秋を抽象していく

バンクシア＊

南半球の　大陸に咲く
孤立した　花々よ
お前達は
オーストラリア大陸だけに　咲き
ヨーロッパも
アメリカも知らない　花々

海流や
気流からも　見捨てられ
透明なガラス器の中で
現代に蘇る
新しい花々の　色彩

お前達は
赤く光る　メキシコガラス
あるいは　長い時間煮込んで
最後の味を出すために
よく磨かれた　銅製の鍋

それは　閉塞された大陸の中で
現代を　否定もせず
肯定もせずに
新しい進化を遂げる
情熱の色

その熱で

何時までも　煮込み続けよ
時代の流れが速ければ
制御装置のように
スピードを吸引した　深い色

何時までも　枯れることがない
現代の芯のように
お前達は
様々な物質で
身を飾る術も　知らない
暗く寒い夜に光る　リースの芯

＊オーストラリアの花の名

花梨のある静物

梢に顔を埋めるように
北風が吹く日に　それは
梢とともに切り落とされた
甘い香りの　黄色い果実

輪切りにする前に　妻は
それをテーブルの上に置き
見知らぬ世界からやって来た
隕石を見る眼で凝視する

静かに呼吸しているように

艶やかな果皮のなかに
詰め込まれているのは
うす桃色の花々
夏の痛い光
澄んだ美しい幼い歌声

七歳になったばかりの娘は　今
電車に乗って十番目の駅の
丘の上に建つ白い病院の中で
点滴をしながらベットの上……
その娘の不在を後悔するように
南アメリカ大陸からやって来た
アルコールの壜は肩を落とす

娘の幼い肌に似た光を映す
ヨーロッパ大陸の花瓶には
溢れるばかりのドライ・フラワー
雪解け水で育ちながら
眩しい太陽と戦って水分が蒸発して
無機物に還ったトウモロコシ

輪切りにする前に　妻は
その花梨(かりん)を　やわらかく注視し
胎内にあった羊水を
ひとりで静かに感じている

桜

北極星を廻る星々のように
桜を基点に季節は巡り
その軸性を広野のなかで追跡せよ……

桜が咲くと
密度が濃くなった空気のなかで
最短になる愛の射程距離

桜を見ると
青空よりも軽々と
封印されていた言葉を言った少女の唇

桜が香ると
露天風呂に身を潜める
曲線だらけの年増女

桜に触れると
放課後の校舎の陰で
恋のパズルを解いていた少年の日々

桜が散ると
金メダルには手が届かない
サラリーマン達の闘いが始まる

桜の幹を切ると
犯罪者の傷口から流れ出た
逆行した季節が凝固する

移り住んだ土地に桜が無いと

暗号のような春を持て余したまま
トボトボと夏の欠片を探し廻る

ばら苑の肉声

遊園地が一つ廃園になる――
アメリカからやってきた
アニメの世界の遊園地は
夢と現実のすり替えが巧み
子供たちは現実の恐怖を忘れ
ジェットコースターの
模造品のような恐怖に遊ぶ
子供たちは現実の希望を忘れ
ミニチュアの城塞の中で
捏造された希望に酔う
あるいは幾何学模様の
抽象された虚構の花に気をとられ
ばら苑の薔薇を忘れそうになる
あれは蛍が飛ぶ季節に咲き
女王や妃の気品と繊細に溢れ
あれは現実の肉声を夢に誘う

遊園地が一つ廃園になる――
それでも肉声の美しさを
永遠の波長に託すように
ばら苑を残そうとする人々
一本の薔薇の木から数本の蔓が伸び
赤い花と黄色い花のデュエット
オレンジ色の薔薇の花には
皇室へ嫁いだ妃の名を与え
清楚な純白の薔薇の花には

ヨーロッパの女王の名を与え
燃える紅蓮の薔薇の花には
パリジェンヌの女優の名を与え
ばら苑の薔薇には人間の肉声がある
真紅からオレンジへ流れる色彩の声
バイオレットから純白へ上昇する声
そして背景には斉唱する真っ青な空

競争原理

競争原理は正しいのだろうか？
人と人が競い合って全力を出して
何時までも走り続けて行くならば
やがて息が切れて倒れて仕舞うに違いない

競争に勝たなければならないのだろうか？
会社と会社が競って値引きをして
社員は残業ばかりしてリストラされれば
人生に消耗して犯罪者か自殺者になるしかない

競争原理が唯一の方法なのだろうか？
そんなことが何時までも強要されていって
世界チャンピオンのように勝者は一人だけになって
敗者だらけの社会になるのだろう

競争と戦争は違うのだろうか？
武力の強い国と弱い国が競争して
弱い国が負けて植民地のようになって
強い国は美味しいものばかり食べるのだろう

競争原理は何処でも必要なのだろうか？
学校の友だちは競争してできるのだろうか？
看護婦さんの仕事はお互いに競争するものだろうか？
病人同士は競争して早く治るのだろうか？

競争だけが評価の基準なのだろうか？
赤ちゃんは大きい方が勝ちなのだろうか？
お坊さんの読経は牧師さんの祈りに勝つのだろうか？
ばら苑の薔薇を見たい気持ちも競争心なのだろうか？

競争原理再考

1　競争が公平に行われるためには
　　スタートラインは平等でなければならない
　　公正なルールを無視したゲームは
　　楽しみも興醒めして長く続かない

2　競争を強要される者の視線は狭く
　　美しい多くのものを見逃している
　　全速力で疾走する選手たちは
　　ゴールばかり見て道端の花が見えない

3　相手に勝つことは不幸を一つ生み
　　不健康で幼稚な精神と隣り合わせ
　　競争の世界に必要な自由とは無頼で
　　その究極はアナーキーになるしかない

4　競争を標榜し指示する為政者は

スポーツを観戦するように熱狂的だ
全力で競技する選手は何時も疲弊し
やがては何時も寿命を縮めることになる

5　本当に正しい競争原理とは
人に勝つ前に自分に勝つことだ
人間同士を戦わせて見物した
ローマ帝国の皇帝はもう沢山だ！

6　人と人との戦いには必ず敗者が生まれ
最後の勝者は一人だけに違いない
自分との戦いに目覚めた者は
そのときから全員が勝利への道を歩む

7　自分との戦いに勝つことは
新しいものを創造することだ
美しい薔薇の花を育てるために
一つの太陽と競争する者はいない

8　競争原理は人間を孤独にする
反社会的反人間的な制度である
山の頂上を目指す者たちを見よ！
最も優れた者は列の最後尾を歩く

アクセス不良

スタンドアロンのＰＣだった

ＬＡＮへの接続が出来ずにいた
エラーの表示が忌々しい
ネットワークアダプタの競合らしい
マルチベンダーになっているから
ホストの業者に聞いても分からない
ＣＰＵのリプレースのときは
ＳＳＴまで一緒に行ったのに
ＣＯＢＯＬやＪＣＬもやったのに

ＷＩＮＤＯＷＳのＣＤ・ＲＯＭと
ＬＡＮアダプタのＦＤも用意したが……
ハードウェアは検出されて無駄だった
モデムはこの際関係ない
セットアップのやり直しか
リカバリーＣＤを使おうか
元には戻るが　時間がかかる
プレインストール後も大変だ
おや？　ワープロソフトに通信機能が……

必要なのはネットスケープナビゲーター
これだ　これだ　ファイルの削除だ
サーバーへのアクセスも　もうすぐだ
消えた　消えた　競合のマークが消えた
ヘルプでは分からなかったトラブルだ
ペーパーレスではなくなるぞ
共用プリンターが使えるぞ
グループウェアも使えるぞ
他のクライアントへメールを出そう
世界中のホームページを波乗りだ

おや？　おや？　またまたトラブルだ――
単なるハードウェアの不良だった
ボード板へのアクセス(接続)不良が原因だった

失恋も　病気も　不況も　戦争も
みんな　みんな　原因はアクセス不良かな？

あとがき

詩を書かずにはいられない、という純粋な詩的エゴイスムに忠実になろうとしたとき、詩の領域をすべてプライベートな情念で俯瞰し得ない逆説に私は気付きました。そのとき私は、もう少し広範な働きをもった新しい詩の世界が開始される予感を持ちました。詩を書かせる詩的内実は、殆どが外的世界へ向けられた光線の反射を伴い、私はその光景を消却したものに満足出来ない自分を発見していました。つまり私の詩的内実は、自己という定点から詩的世界という広大な宇宙と交信可能な状況を生み、外的世界によって変容させられた自分を自覚するに至りました。

外的世界の中には、私が愛する者たちや過去への思い出も含みますが、同時に四行二連詩という形式美も存在していました。「Ⅰ（四行二連詩序奏）」としてその一端を纏めてみました。「Ⅱ（蛍讃歌）」は、自己を超えた自然の象徴として、寓居の裏の谷戸に実際に生息していた蛍たちへの思いを表現しました。このとき私にとって詩は、自己の感情表出以上の何かであると確信するようになりました。つまり自然の儘の蛍を何とか残したい、と希う感情が既に個人のものではないと自覚するに至りました。即効性はないかも知れませんが、詩の機能には社会や政治を変えたいと希う人々の意志を素直に表現し、その可能性にも応える側面があるように感じました。そのためには誰にでもその表現が可能な芸術形態としての詩の使命があり、人間の良心に基づく感情表現に寄与する詩的機能は決して詩の芸術性に逆行しないと私は考えます。このとき四行詩は、その芸術性の補完的役割を担うための一つの形となるでしょう。勿論、私は口語自由詩の領域も、詩的内実の自由な表現を保障する形として保持されていくべきものであると思います。定型詩は自由詩と対立するものではなく、詩というジャンルの芸術を二重にも三重にも強靭にして、弾力性のある美しくて丈夫な布地にしてくれるものであり、詩精神を蹂躙していく多くの外圧から護ってくれるものであると考えます。「Ⅲ（ソウル行）」は、平成九年の夏に、李好童（イ　ホドン）氏夫妻のご案内で訪韓したときの印象詩です。偏見を超えた詩的真実には、国境は存在しません。「Ⅳ（小さな願い）」は、仏典や聖書に疎遠な者であっても、血液と水分から成る人生を無味乾燥の符号化された日常に明け渡すことのない真実の祈りの言葉として、詩が許容出来る例証の一つとして創作したものです。

詩人は、自らの内面的美しさの外に、外的世界の全ての真実と美を自由に表現することが可能な人です。そのためには逆説的に、自らの心の支点は何者にも奪われることなく、外的世界が優先していく如何なる規制や利害からも精神的に独立した人であり、人間的良心とユマニスムに基づく自由な表現を実践する人であると私は考えます。その精神的独立を詩人の必須と見做す全ての人々にこの詩集を捧げます。

詩集を上梓するに際し、宿谷志郎氏には二十六年前の第一詩集同様に、今回もお心遣いを頂き大変お世話になりました。衷心より感謝申し上げます。

平成十六年一月四日　犬蔵谷戸の寓居にて　E-mail〈masanot@b01.itscom.net〉

高　村　昌　憲

詩集 六つの文字

http://p.booklog.jp/book/49833

著者：高村昌憲
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/49833

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/49833

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.